



2024年度 陸前高田プロジェクト実施報告

テーマ

「陸前高田市の歩みから持続可能な都市について学び、
地方都市が持続可能な都市となるために自分たちにできることを考えよう」
-- SDGs「11 住み続けられるまちづくりを」の視点から --
《Rikuzentakata × SDGs × YOU》

参加者

立教大学14名、香港大学5名、米国より5名（スタンフォード大学、キーン大学
カリフォルニア大学バークレー校およびデイヴィス校）計24名

実施日

2024年7月13日、8月24日～30日

プロジェクト概要

立教大学および海外の大学からの参加者全員で岩手県陸前高田市を訪問し、
4泊5日のフィールドワークを行いました。

「陸前高田プロジェクト」は、東日本大震災の被災地である岩手県陸前高田市で
フィールドワーク（4泊5日）を行い、同市のこれまでの歩みや現状、課題を共有し、
陸前高田市の方々や参加者全員が共に様々な問題について考えるプログラムで
す。2013年度からパイロットとしてスタートし、正課科目として継続して実施してい
ます。2024年度は立教大学、アメリカのスタンフォード大学、カリフォルニア大学
バークレー校、同デイヴィス校、キーン大学、および香港大学より、専攻や学年の異な
る24名の学生がともに課題に取り組みました。。

最終報告会では、SDGs Goal 11「住み続けられるまちづくりを」の視点を軸に、
フィールドワークで学んだこと、グローバルコミュニティや自分が暮らすコミュニティ
の課題と持続可能性への取り組み、自分自身が取り組むべきことなどについてグ
ループごとに発表しました。

プロジェクト内容

事前研修

事前研修① 7/13(立教生のみ)

本プロジェクトに取り組むにあたり、各自の目標確認、陸前高田市や東日本大震災について理解を深めるための下調べなど、現地研修に向けて準備を進めました。

事前研修② 8/24(@立教大学)

立教生と海外大生が初対面。アイスブレイクで打ち解けた後、SDGs Goal 11「住み続けられるまちづくりを」の考え方や、現地研修において深い学びを得るための心構えについて理解を深めました。



現地研修@陸前高田市

Day1 [8/25]

現地研修1日目。いよいよ陸前高田へ出発。東北新幹線に乗り一ノ関駅で下車後、バスに乗継いで陸前高田市に到着しました。津波の被害を受けた海岸エリアに開設された津波伝承館を見学後、復興祈念公園や防潮堤、奇跡の一本松、震災遺構である旧気仙中学校を視察しました。



初日の夜は宿泊先の箱根山テラスで夕食後、地元出身で東日本大震災当時は中学生であった齊藤様を迎えてお話を伺いました。校舎の窓から津波が押し寄せる様子を目の当たりにし、友人と共に避難したこと、震災発生後の生活で子どもの視点で感じた様々なことを率直にお話いただきました。以降、まちの復興を間近に見ながら過ごし、現在も地域に密着した仕事に就きながら、子どもたちに地域の歴史や文化を伝える活動もされています。



Day2 [8/26]

現地研修2日目。海を臨む朝食のあと、陸前高田グローバルキャンパスへ。陸前高田しみんエネルギーの大林様から講話をいただきました。地域電力会社として、地元の自然エネルギー発電を通して、地域の持続可能性・活性化を推進する先進的な取り組みを目指されています。



続いて、震災直後の市民を元気づける拠り所として2011年8月に開設されたコミュニティカフェ「りくカフェ」の運営メンバー、吉田様からお話をうかがいました。震災後の市民コミュニティへの貢献、まちの復興に伴い変化してきたりくカフェが担う役割についてお伺いしました。



その後、バスで「りくカフェ」に移動してランチタイム。栄養に配慮されたお弁当をいただきました。



その後、グローバルキャンパスに戻り、元市役所都市計画課勤務で現在はほんまる株式会社に勤める永山様から、震災復興から新しいまちづくりに取り組む陸前高田市のお話をうかがいました。



そして、この日は学生が楽しみにしていた民家訪問。グループに分かれて地元のご家庭を訪れ、地元の生活を体験させていただいたり、夕飯をごちそうになったりしました。海外大生はもちろん、立教生にとっても陸前高田で暮らす方のお話を直接聞くことができた濃密なひとときとなりました。



Day3 [8/26]

3日目は、500年以上の歴史をもつ「普門寺」へ。震災供養のために多くの方の手により作られた五百羅漢や願い桜（吊るし雛）などを拝観しました。副住職の熊谷晃生様より、地域に寄り添うお寺の歩み、震災後のお寺の在り方などについてお聞きしました。



続いて、2021年に新庁舎が完成した陸前高田市役所へ。佐々木市長を表敬訪問した後、政策推進室の高橋室長より、現在の市の政策や課題、まちづくり総合計画についてお話を伺いました。



その後、奇跡の一本松ホールへ移動。津波により被災してしまった卸問屋から、環境やまちづくりに配慮した総菜店に転換した「橋勝商店 和笑輪(わわわ)」の弁当をいただきつつ、陸前高田市観光物産協会の小林様より、ここまでの視察や講話に関する補足をいただきました。





続いて、地元食品スーパー「マイヤ」の代表取締役会長、米谷春夫様にお話をうかがいました。震災当時、大船渡市、陸前高田市の6店舗中5店舗が被災されました。自身のご家族、多くの従業員を亡くされたなかでも、「スーパーは市民のライフライン」と、地域を再生させる使命感のもと事業を進められてきました。

Day4 [8/27]

4日目は陸前高田グローバルキャンパスからスタート。



震災で失われた陸前高田の街を1/500の縮尺で復元した「失われた街」模型の展示を見学しました。まちが積み重ねてきた記憶を保存・継承するために、地域の人々と共に模型に着色し、思い出の場所に「記憶の旗」が立てられています。震災後のまちの姿も重ねられており、震災が陸前高田にもたらした被害の大きさを痛感しました。

続いて、広田町にある地域交流の拠点「長洞元気村」へ移動。津波の被害を受けた事務局長の村上様の旧住居を見学後、元気村の「なでしこ会」の皆さんが用意くださった郷土料理を味わいました。その後、村上様に、震災当時のお話を聞かせていただきながら、震災時に直面する様々な問題や人々の判断について実践的に学ぶ「クロスロードゲーム」を行っていただきました。



その後グローバルキャンパスに戻り、屋外に展示されている仮設住宅体験館を見学しました。実際に仮設住宅で生活されていた方より当時の生活の様子についてお話をうかがい、人と人とのつながりのあたたかさや難しさを考えました。



陸前高田での最後の夜は”発酵”をテーマにした商業施設「CAMOCY(カモシー)」での交流会。陸前高田に暮らす若い世代と食卓を囲み、地元素材と発酵技術が織りなす美味しい料理をいただきながら会話を楽しみ、一晩とは思えないほど深く交流をさせていただきました。



Day5 [8/29]

5日目、現地研修最終日。現地研修での学びからの考えをグループごとに話し合い、最終報告会に向けての準備をしました。お世話になった現地スタッフの方々に感謝をお伝えしたあと、名残惜しくも東京へ。



最終報告会・振り返り 8/30（立教大学）

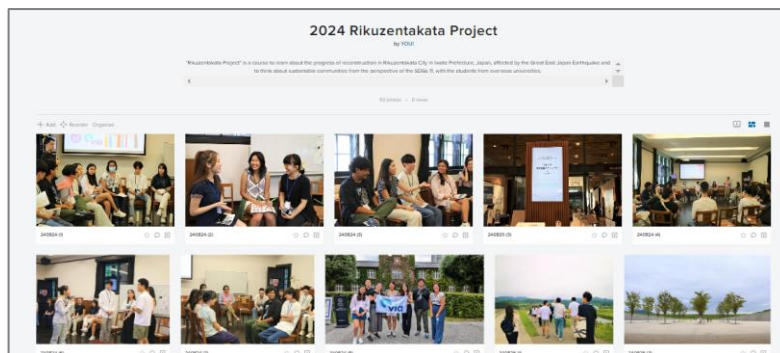
最終日8/30は最終報告会。立教生と海外大生混合の5グループによる発表が行われました。陸前高田の震災復興やまちづくりに関して学び意見交換した内容をふまえ、SDGs Goal 11の観点から、グローバルコミュニティや自分たちが暮らすコミュニティが抱える課題を再認識し、各都市が持続可能な都市となるために自分たちには何ができるのか、グループで話し合った結果を発表しました。今回お話をうかがった陸前高田市の方々にもオンラインでご参加いただき感想や考えを共有いただきました。



2024陸前高田プロジェクト フォトアルバム

プログラムの様子はフォトアルバムでも紹介しています！

[More Pictures here!](#) ↓



発表内容

Group 1



陸前高田での包摂的なまちづくりとSDGsの関連性に焦点を当て、災害時におけるコミュニティの役割や、市民の安全の重要性について学びを深めました。また、自分たちが暮らす地域との違いを認識し、将来の防災都市計画への意欲を強めました。陸前高田の取り組みから、コミュニティの強さには人々を結びつけ、新しいアイデアを生み出す力があることを見出しました。

Group 2



包摂的で耐久性のあるコミュニティには、地域の強いつながり、伝統的な価値観と新たな取り組みの融合が必要だと考察しました。また、自分たちのコミュニティと比較して、都市部・郊外・地方問わず直面する問題には共通性があり、陸前高田の取り組みから学ぶべきことは多いこと、さらに、自分自身も他者と協力しながら課題に取り組むことで社会に影響を与える力があることを理解しました。

Group 3



陸前高田での学びから共同体におけるレジリエンス（災害に対する強靱さ）について考えました。日本、アメリカ、香港の3つの事例を紹介しながら、レジリエンスは、自然災害から立ち直るために不可欠な力であり、コミュニティの強い社会的つながりと相互扶助が大きく関連していることを示しました。陸前高田市では、個人のメンタルヘルスに対処するため、絆を強化することで困難に適応し、このレジリエンスを体現していると学びました。

Group 4



陸前高田で学んだ教訓、地域とのつながり、今回の研修から得たインスピレーションについて考察しました。ネットやSNSの情報より、現地で直接見聞した情報の重要性、サステナブルな都市の実現に対する個々の責任感などに触れ、事前研修で学んだ「Avctive」「Brave」「Furious」「Open-minded」のフレームワークを意識しながら、気づきや変化、今後への抱負を発表しました。

Group 5



陸前高田での学びとSDGs Goalsを参考に、まちづくり、コミュニティの発展のために必要な7つのキーワードを集約した独自のチェックリストを作成。各ワードについて、現地研修で見聞した陸前高田の取り組みと、自分たちのコミュニティとの比較、今後への提案を考察しました。また、このチェックリストはすべてのコミュニティに共通するものであり、今回の学びを共有することで変化を起こしていけたら、と結びました。

本プログラム参加学生の体験談です。

■節丸 真愛さん(コミュニティ福祉学部福祉学科 4年)

□ 今回のプログラムでの一番の学び

私にとってこのプロジェクトでの一番の気づきは、グローバルでもローカルでも大切なのは「一人ひとりと向き合うこと」ということです。陸前高田市では、市民・行政・企業といった様々な立場、また東日本大震災での被災の程度や内容にも違いがある方々のお話を聞かせていただく機会がたくさんありました。その中で、立場によって異なる見え方があること、一見同じような立場に見えたとしても全員がそれぞれ異なるストーリーと意思を持っていることに気づきました。その違いが時に対立や摩擦を生むこともあるけれど、異なる視点から得られる学びばかりだと感じ、向き合い続け対話を重ねることを大切にしていきたいと思いました。



また、このプロジェクトでは海外からのメンバーたちとも1週間学びを共にします。これほどグローバルな環境で過ごすのは初めてだったのですが、同じ国や同じ大学から来ているからといってその学生同士が似ているとも限らず、全員がオンリーワンの個性と魅力を持っていることを実感しました。

多様性を持つチームやコミュニティで協働する時、誰一人として同じ人はいない、関わる仲間の数が増えたり多様性が増したりしたとしても一人ひとりと心を通わせていく地道な関わりを積み重ねていくことを大切にしていきたいと感じました。

□ 読者に共有したいこと



私はこのプロジェクトを通して、グローバルな環境で挑戦するスタートラインに立てた気がしています。海外からのメンバーと宿舎の部屋でも一緒に過ごしたり、チームで発表の準備をしたりと、参加前に想像していた以上に密に関わることができました。私は英語がそれほど得意ではないので、伝えたいことを思うように表現できず悔しさやもどかしさを感じる場面も多くありました。自分の現在地を実感できたことで、今は「英語を本気で頑張りたい!」というモチベーションに燃えています。一方で、コミュニケーションを取れて通じ合える大きな喜びもたくさん実感できました。

そしてグローバルな環境の中で1週間過ごして思いっきりチャレンジできた経験が大きな自信になりました。個性豊か、バックグラウンドも様々でありながらも魅力的な仲間と過ごす中で、かなわないなあと感じる部分も多く刺激をもらったのと同時に、その素敵なメンバーの中でも自分にしかない視点や自分だけができることもきっとあると実感できる場面もたくさんありました。

□ プログラム参加を検討している学生へのメッセージ

陸前高田プロジェクトを通して私の世界が大きく広がったと感じています。何年か先に少し成長した自分になれば、間違いなくこの日々を振り返って思い出したいと思える私にとって原点です。一生の宝物になるような仲間、本当にあたたかい陸前高田の方々、そして新しい自分にも出会える場所なので、ぜひみなさんも挑戦してみてください。



■飯塚 彩智さん(文学部文学科英米文学専修 3年)

□今回のプログラムでの一番の学び

多様な視点から学びを得るなかで震災を自分ごととして捉え、持続可能な社会の形成におけるコミュニティの重要性やメディアと現実のギャップに気がつくことができました。まず、私は本プロジェクトに参加する前は震災を自分の問題として捉えることが難しいと感じていました。しかし津波の最高到達地点や震災遺構である気仙中学校、震災前には建物が立ち並んでいた場所に広がる自然を目の当たりにし、写真や映像では伝わらない地震や津波の威力を肌で実感したことで、震災を自分ごととして考えるようになりました。また地域の方々にお話を伺うなかで、コミュニティのつながりの重要性を学びました。



大切な人や街を失ったことで深い喪失感を抱えた人々を支えたのは、感情を共有できるコミュニティがあったというお話が印象に残っています。さらにメディアの報道と現実ギャップがあることに気が付きました。震災当時避難所で炊き出しを明るく手伝う子どもたちを取り上げた記事が多くありましたが、



そのような記事が子どもたちに悲しみたくても明るく振る舞わなければいけないというプレッシャーを与えていたように感じるというお話が心に残っています。また立教大学の学生だけでなく海外大学からの参加学生や地域の方々と議論を重ねることで、視野を大きく広げることができました。特に、異なる価値観を持つ学生が集まっているため自分では考えもしなかった視点の質問が投げかけられることがあり、そこから新たな気づきを得ることができました。

□読者に共有したいこと

災害はいつでもどこで起こるか分かりません。そのため過去の教訓を学ぶことが重要ですが、思い込みを避けることがさらに大切だと本プロジェクトを通して考えました。陸前高田では東日本大震災の際、海岸線に近い地域より少し離れた場所に住んでいた方々が津波の犠牲になったケースが多く見られました。この背景には、「過去にこの地点まで津波が到達したことはないから今回も大丈夫だろう」といった過去の教訓による思い込みが影響しています。また正常性バイアスによる根拠のない思い込みから津波の犠牲になった方も多くいたと伺いました。

これらの事例から、過去の教訓を学ぶことに加えて正常性バイアスの存在を認識し、安易な思い込みを避けることが命を守る上で重要だと考えます。また、日頃からコミュニティと交流をすることの重要性も学びました。

東日本大震災の際に子どもは学校で避難したため助かったが、親が子どもを心配して学校に向かったため亡くなったケースがいくつもあるというお話を聞きました。この命は、普段から家族で震災時の行動を話し合う時間を設けていれば守れた可能性が高いと考えられます。そこで、より多くの人に災害時は安易な思い込みをしないこと、日頃からコミュニティのつながりを大切にすることの重要性を伝えていきたいです。



□ プログラム参加を検討している学生へのメッセージ

陸前高田プロジェクトを通じてかけがえのない仲間と出会い、非常に濃い学びを得ることができました。本プロジェクトは私にとって一生の財産です。このプロジェクトに興味がある方は、ぜひ挑戦してみてください。

